

『伊勢物語』の女君たち 2

Ladies described in “Isemonogatari” part 2

坂野 晴和

Harukazu Banno

目次

1. はじめに (紀要第 43 号)
2. 「こともなき女ども」 第 58 段 (紀要第 43 号)
3. 高安の郡の女と『筒井つ』の女君 第 23 段 (紀要第 43 号)
4. 花橋の女君ほか 第 60 段 第 62 段 第 24 段 (紀要第 43 号)
5. 「ゆく蛍の女」と「けしうはあらぬ女」 第 45 段 第 40 段 (紀要第 43 号)
6. 「白玉か何ぞ」と問ひし女君 ほか 第 6 段 第 4 段 第 3 段 (紀要第 43 号)
7. 伊勢の斎宮 第 69 段 (紀要第 43 号)
8. 「みちの国」の女君 第 14 段 第 15 段 第 115 段
9. 「大和にある女」君 第 1 段 第 20 段
10. 「色ごのみなる女」君 第 25 段 第 28 段 第 37 段 第 42 段
11. 「世ごころつける女」君 第 63 段
12. 「宮なりける」母の子への思い 第 84 段
13. 「あてなる女」の尼になった女君 第 102 段 第 104 段 第 16 段
14. 「子ある中」の女君 第 94 段
15. 「つれなかりける」女君 第 34 段 第 54 段 第 57 段
16. 「つれなき人」 第 90 段
17. 「なま心ある女」君 第 18 段
18. 「瘡一つ二つ」の女君 第 96 段
19. 「^{むげら}免原の郡」の女君 第 33 段
20. 「西の京」の女君 第 2 段
21. 「はかなくて絶えにけるなか」の女君 第 22 段 第 21 段
22. おわりに

8. 「みちの国」の女君 第 14 段 第 15 段 第 115 段

第 14 段は僻遠の地、陸奥での話である。男があてもなく東を目指し、行き着いたのが陸奥の国である。その女性が都人を珍しく思い、心ひかれ、男に思いを寄せたのである。「なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり」(なまじっか中途半端に、こん

なに恋のために死なずにいては、蚕になったほうがよさそうだったなあ、ほんのちょっとした間でも)⁷と歌を詠んできた。男は「歌さへぞひなびたりける」、人柄はもちろんのこと、歌までも田舎臭いとは思ったが、女の心情に感ずるところがあって共寝をした。だが、夜深い中で帰ろうとしたので、女は「夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」と方言交りの歌で男に哀訴した。しかし男は「京へなむまかる」と言って歌を詠んだ。「栗原のあねは松の人ならば都のつとにいざといはましを」、あなたはここの土地の人なので、一緒に京へとは誘えないのが残念ですと詠んだのであった。女はすっかり嬉しくなって、あの人は私を愛していたのだと人々に言ったという。

都人の田舎・鄙人に対する蔑視が、一方で素朴で純な東北の一人の女性の姿を浮き上がらせているのがこの一段である。

第 15 段ではそれが一層際立ったものとなっている。都人の優位性、鄙の蔑視である。話はそれを端的に物語るのみである。男の先入観で「なでふ事なき人の妻」の許に通い、歌をやった。「しのぶ山しのびて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく」と。女は限りなく素晴らしいお方とは思ったが、一方の男は「さるさがなきえびすごころ見ては、いかがはせむ。」と思ったというのである。一度は自分から積極的に女性に近付いておきながら、「えびすごころを見ては、いかがはせむは。」と田舎者であることで、その女性を捨ててしまったのである。

第 115 段は、同じく「みちの国」の女性の話で、一緒に住んでいた男が「都へいなむ」といって帰ろうとするので、別れの宴を催し、酒を飲ませて、悲しい別れの歌を贈ったというのである。「おきのあて身を焼くよりも悲しきは都しまへの別れなりけり」と。「おきのあて身を焼くよりも悲しきは」と別れの辛さを訴えたのである。

第 116 段は、一連の「東下り」の最後の話ともいわれる⁸ように、第 9 段に対応したものとなっている。「東のかたに住むべき国求めに、とてゆきけり。」すずろにみちの国までまどひいにけり。」「京に思ふ人」「京に思ふ人」「身を要なきものに思ひなして」「なにごとみみなよくなりけり」。ここでは京のいとしい女性に「浪間より見ゆる小島の浜びさし久しくなりぬ君に逢ひみで」と歌を詠んで、それに「なにごとみみなよくなりけり」と書き添えて送ったという話である。「浜びさし」と「逢ひみで」の解釈が二様に分かれてはいる⁹が、いずれにしても前者は「久しく」の序詞であり、後者は「久しく」の内容説明である。結びの内容も、万事滞ることなく旨くいったと言っているのである。ここでもやはり、みちの国の女性よりも都においてきた都の女性の方が恋しいのである。

9. 「大和にある女」君 第 1 段 第 20 段

第 1 段、第 20 段は共に大和の国の女性の話である。

第 1 段は「初冠」の段として有名であるが、元服した男が狩りの途次、「その里に、いとなまめいたる女はらから」を「かいまみ」たというのである。生き生きとした自然の美しさそのものの二人の若い姉妹を盗見した。更にその女たちが「古里にいととはしたなく」いたの

で心をひかれ、「春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず」と狩衣の裾を切ったものに歌を書いてやったという話である。古都に不似合なほどみずみずしく清新な乙女の姿に「しのぶのみだれかぎり知られず」と心ひかれたのである。置かれた状況・環境の中での自然な振舞いが男を引きつけたのである。

第 20 段は同じく大和の女性の話ではあるが、ここにみられるのは女の才覚、歌の才能、贈答歌の巧みさである。京で宮仕えする男が、大和の女の許から帰る途中で美しい楓を見つけて、その枝に「君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ」と歌を添えておくれた。これに対して大和の女性は、京へ「いつの間につろふ色のつきぬらむ君が里には春なかるらし」と返したというのである。男の女への気持ちに、時をずらして、「君が里には春なかるらし」と「秋（飽き）」を使わないでやんわりと拗ねてみせたのである。

旧都であり、地続きの大和には好感をもち、その女性の振舞い、歌の才能にも他国にない雅なものを見たのである。

10. 「色ごのみなる女」君 第 25 段 第 28 段 第 37 段 第 42 段

第 25 段は「逢はじとも言はざりける女の、さすがなりける」、逢おうとも逢わないとも言わなかった女で、いざとなると逢おうとしなかった女、これが「色ごのみなる女」なのである。男の気を引く、男をじらす女君なのである。この女君と男との贈答の歌で終わるのがこの一段である。「秋の野にささわけしあさの袖よりも逢はで寝る夜ぞひぢまさりける」、朝露に濡れる以上にあなたに逢えないで一人寝る夜の方が一層濡れ勝ることですよ、と歌をおくれた。それに対して、「みるめなきわが身を浦としらねばやかれなで海人の足たゆく来る」と「色ごのみなる女」は返したのである。「みるめ」「わが身」の解釈に説が分かれてはいる¹⁰が、ここでは森野宗明氏の訳注¹¹をとりたい。「いくらやって来ても、せっかくの海松布などない浦だと知らないせいでしょうか、遠のいてもしまわずに海人が、足がだるくなるくらい、せっせと足を運んで来ます(はっきり申しては失礼だから、言わないまでのことで、お逢いするつもりはなく、だから、逢う機会などない私のことを、そういうふうに、つらい、いやな女だと御存じないからでしょうが、そのように遠ざかってもしまわれず、足もだるくなりそうなくらい、通っていらっしやる)」女の返歌であるから、当然のことに「わが身」は女自身のことと考えられるからである。

歌の才能があり、身の処し方にも当代の望ましい女性の姿を描いたのが第 25 段なのである。

第 28 段は「色ごのみなりける女」が家を出てしまったので、男が「などかくあふごかたみになりけむ水漏らさじと結びしものを」とその嘆きを歌に詠んだという短い話である。俗語の多用に男の恨みとは違う心の余裕をみる段になっている。

第 37 段は男と浮気っぽい「色ごのみなりける女」との話で、今、ここに一緒にいても自分が帰ったらどうなるか分からないという不安な気持ちで歌をつくった。「我ならで下紐とく

な朝顔の夕かけ待たぬ花にはありとも」たとえあなたが、はかなく頼りがいのない人であったとしても私を待っていて欲しいと言ったのである。その返しに女は「ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまではとかじとぞ思ふ」と、二人で睦んだ仲なので、今度お会いするまでは一人で紐を解くようなことはするまいと思いますと言ったのである。「色ごのみ」の女の本領を發揮したのである。

第 42 段は女君が「色ごのみ」と承知の上で通っていた男が、たまたま、二・三日都合が悪く、女君の許に行くことができなく、女君のことが気がかりで、「出でて来し跡だににまだ変らじを誰が通ひ路と今はなるらむ」と歌をおくったという話である。伊勢物語の中で、最も意気地のない、女君に振り回される嫉妬深い男の話である。それは「はた」「なほ」の多用、終わりの「もの疑はしさによめる」に顕著である。

「色ごのみの女君」「色ごのみなりける女」君は、当代の男性にとっては大変魅力のある女性であったのである。

歌の才能があればなおさらだった。

11. 「世ごころつける女」君 第 63 段

作品中、最も高齢の女君と男との話である。「世ごころつける女」男好きの好色家で、三人の息子をもち、「百歳に一歳たらぬつくも髪」の女君が、「心情あらむ男」に出会いたいものだと思って、作りごとの夢合わせを息子たちに託す。上の二人は無視したが、末子の三郎は母の心情を汲んでなんとかしようと思案する。そこで思いついたのが当時高名の在原業平であった。その業平が狩りに行くのに出会って「かうかうなむ思ふ」と懇願した。「あはれがりて来て寝にけり」、業平はこの男の話を聞いて母親を不憫に思ってやって来て寝たという。だが、その後男がやって来ないので、家まで行って様子を伺っていると、それを見た男は「百歳に一歳たらぬつくも髪我を恋ふらしおもかげに見ゆ（百歳に一歳たらぬ白髪の老婆が、私を恋慕しているらしい。そんな姿が幻に見える）」と歌を詠んで外に出ていく気配を感じて、女は一目散に我家に帰って臥せていた。男は女がしていたようにこっそり見ていると、女は悲しんで寝ようとして、「さむしろに衣かたしきこよひもや恋しき人に逢はでのみ寝む（むしろに衣を敷いて、今夜も恋しい人に逢わないで一人で寝るだけだろうか）」と歌を詠んだので、それを気の毒に思ってその夜は共寝をしたという話である。

男を欲しがら「つくも髪」の女君という設定、「心情あらむ男」としての在原業平、その実名表記、更にはその説明としての「思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は、思ふをも、思はぬをも、けぢめみせぬ心なむありける（愛する人を愛し、愛さない人は愛さないものなのに、この業平は、愛する人でも、愛していない人でも、差別を見せないで相手を思いやるやさしい心があったのだ）」というのはどうであろうか。色好み業平という伝説の上ののった付言ではなかっただろうか。いずれにしても興味本位の虚構といってよい。

12. 「宮なりける」母の子への思い 第 84 段

第 84 段は母と子の普遍的愛の姿を描いた小話である。

母親は内親王であったが一人息子とは離れて長岡に住み、息子である男は身分の低い宮仕人で、母親のことが気にはなっていたが、度々は訪問することができなかった。その母のところから年の暮れの十二月に「とみのこと(急な用件)」だといって便りが来た。驚いてみると、「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まほしき君かな」と歌が書いてあった。男は母君の心情に感涙して、「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため」と歌を詠んだというのである。

二首の歌とも平明簡潔な表現で、歌意も明白である。歳老いた母親が年の暮れにわが子を思いやる気持ち、子のいつか来る死別を「なくも哉」「千代もといのる」子の気持ちを詠んだものなのである。普遍的母の子を思う気持ち、子の母親に対する気持ちがよく表現されている。

13. 「あてなる女の尼」になった女君 第 102 段 第 104 段 第 16 段

第 102 段 104 段はいずれもかつての斎宮が尼になった話である。前者は「歌はよまざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。」という男が、尼になった女の許に、歌をおくったという話である。「世の中を思ひ倦んじて(男女の仲をつくづくいとわしく思つて)京にもあらず、はるかなる山里に」住んでいた女君に、親族でもあったので、「そむくとて雲には乗らぬものなれど世の憂きことぞよそになるてふ(世にそむいて出家したからといって、仙人のように雲に乗って飛んでゆくことはできないが、男女の間の辛いことはみんなよそごとになるということです。どんな心境ですか)」と見舞いの歌をおくった。

生身の一人の女性が斎宮として生きた、その厳しさ・辛さがよく表現されている。

一方、第 104 段は同じく斎宮であった人が格別の理由もなく尼になり、賀茂の祭見物に出掛けた折りに、男から歌をおくられ、見物途中で帰ってしまったという話である。「世をうみのあまとし人を見るからにめんはせよとも頼まるかな」、俗気の抜け切らない女君に、世間を厭って仏門に入られた尼僧だとお見うけしますので、せめて目くばせをして下さらないものかと、期待していますよ、と男は心の中を詠んだのである。「憂み・海」「尼・海人」「見る・海松藻」「目くはす・藻食はす」と掛詞・縁語を多用して、遊び半分の歌をつくり贈ったので、女君は男を振り切ってさっさと帰ってしまったのである。

更に、第 16 段にも尼になった女君の登場する話がある。

紀有常の妻で、「年ごろあひなれたる妻やうやうとこ離れて、つひに尼になりて(長年つれ添ってきた妻が次第に床も別々になり、尼となって)」、先に尼になった姉のところへ行くのである。紀有常が時流にとり残されて、「貧しく経ても、なほ昔よかりし時の心ながら、世の常のこともしらず」という状態になった。そんなときに妻が出家するのである。そこで「ねむごろにあひ語らひける友だち(親密につき合っていた友・業平)」に「何事もいささかなる

こともえせでつかはすこと(なんにもほんの僅かなこともようすることが出来ないで送り出すのが情ないことです)」と手紙に書き、次の歌を添えて送った。「手を折りてあひみしことを数ふればとをといひつつ四つは経にけり」、「とをといひつつ四つは」には40年とする考えと14年とする考え¹²があるが、夫婦の生活を考えると「まことにむつまじきことこそなかりけれ」とはあるものの14年では「とこ離れ」には早すぎ短か過ぎる、やはり40年が妥当ではないだろうか。「人がらは心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にも似ず」ともあり、有常の性格・人柄からも言えることである。だが、ここでは尼になる妻のことでなく、男の友情、有常と業平の話として展開してゆく。贈りものとして「夜のもの(寝具)」を貰い、それに対するお礼の歌を二首、返したというのである。

14. 「子ある中」の女君 第94段

第94段は前夫との間に子供をもつ絵かきの女君の話である。男がその女と同棲しなくなって、女には新しい男ができたが、時々は音信があった。男が女の許に絵を描くように人をやって頼んだが、新しい男が来ていて直ぐには返事もなかった。そこで男は恨みごとを書いて歌も一首添えて送った。「秋の夜は春日わするものなれや霞に霧や千重まさるらむ」、春の霞(前夫)よりは秋の霧(今の夫)の方が千倍も勝っているのでしょうかと女君を揶揄したのである。女君は「千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ」、秋は木草の花ももみじもことごとく散るときなので、と新しい夫との仲もやがては絶えることだろうと返した。女君の才覚が春秋論争にすり替えられて男は一本取られたのである。

女君の才覚を賞めた一段となっているのである。

15. 「つれなかりける」女君 第34段 第54段 第57段

第34段は「つれなかりける人」、薄情な女性に恋して、「言へばえに言はねば胸に騒がれて心ひとつに 歎くころかな」と歌をおくったという話である。自分の恋心を相手に打ち明けられないで、悶々の日を送っているというのである。付言ではこの話に対して、「おもなくて言へるなるべし」としている。恥かしげもなく詠んだのであろう、という。気の弱い、それでいて一途に自分の今の気持ちを相手に訴えかける男の姿を「おもなく」、臆面もなく言ったのである。女君以上に若い初心な男を描いたのである。

第54段も同様の話で、「つれなかりける女」に、「行きやらぬ夢路をたのむ袂には天つ空なる露やおくらむ」と歌をおくったというのである。行こうにも行くことが出来ない夢の通り路だが、それを頼みとして寝るしかない私の袂には、大空の露が置くのであろうか、涙ですっかりぬれていきます(本文校注)と、薄情な女君に訴えたのである。

両段ともに男の心情は描かれてはいるが、女君は「つれなかりける女・人」とあるのみである。薄情な、男の気持ちに対して素知らぬ態度をとる女・人というだけである。殊に第34段では男が若過ぎるのか、気が弱過ぎるのか、「いへばえに、いはねばむねにさはがれて、

言葉に出して言おうとしてもそれは出来ないで、言わないでよくと胸騒ぎがして、という状態では、相手には男の気持ちが分かる筈がないのである。この歌で初めて女君は男の気持ちが分かるのである。一方的に女君を「つれなかりける」と決め付けるのには問題がある。更には男の行為に対する「おもなくて言へるなるべし」という付言も女性蔑視・男性優位社会、男性中心社会のものの考え方と言わざるを得ない。

更に第 57 段にも、「つれなき人のもとに」、男の「人しれぬ物思ひ」を歌に託したという同種の話もある。

「恋ひわびぬ海人の刈る藻に宿るてふわれから身をもくだきつるかな」恋い慕う気持もなくなってしまった、海人の刈る藻に住みついているという「われから」でもないのに、自分から身を亡ぼしてしまったことだ、と歌を詠んだのである。切ない男の片思いを歌にして女君のもとに送ったのである。

16. 「つれなき人」 第 90 段

第 90 段は前章で扱った「つれなかりける女」と同種の話であるが、ここには女性が描かれている。第 90 段は、「つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけむ」、薄情な女君をなんとかしようとした長い間思いつづけていたので、女君も私に心を許してか、とある。そして「あすもの越しにても」といったので、男は喜んだが、一方で不安でもあったので、咲き誇る桜によせて「さくら花今日こそかくもにほふともあな頼みがたあすの夜のこと」と歌を詠んだという話である。付言の「といふ心ばへもあるべし」は後人の解説ではあるが完結したこの話には余分で意図が不明である。

17. 「なま心ある女」君 第 18 段

「なま心ある女」の近くに歌を詠む男がいた。この生半可な女君はその男を試そうとして菊の花の色あせたのを折って歌をおくった。「紅ににほふはいづら白雪の枝もとををに降るかとも見ゆ」、紅色にほんのりと映えるというのは、一体どうなったのでしょうか。白雪が枝もたわたとたわむばかりに降るかとも見えています。 あなたの移り気な色づいたお心は、一体どうなったのでしょうか、ちっともそのようには見えず白けていらっしゃって¹³、男はその歌の意味が分からないような振りをして、返歌した。「紅ににほふがうへの白菊は折りける人の袖かとも見ゆ」。紅に照っている色を上から隠すかのように白い白菊は、これを折ったあなたの袖の重ねの色に見えますね¹⁴、あなたの好色の下心が見えますといったのである。男は贈答歌のルールに従い、「紅ににほふ」と「とも見ゆ」と同一のことばを二つも使って女君を揶揄したのである。女君の「なま心」、中途半端な歌心・風流心のあり様を本格的な和歌によって戒めたのである。

18. 「瘡一つ二つ」の女君 第 96 段

男が長い間、女君に求愛をし続けてきた。女君は男の余りな熱心さに絆されて次第次第にその男を愛するようになった。時は六月十五夜の頃であった。女君が身に瘡が1つ2つ出来てしまったので男の許に「いまはなにの心もなし。」「すこし秋風ふき立ちなむ時、かならず逢はむ」と言ってよこした。「今はあなたのお気持ちに対して何の異存もありません」「すこし秋風が吹きはじめるようになった時、きっとお会いしましょう」と。秋風の吹く頃には気候もいいし、私の瘡も当然のことに治るでしょうから、その時にきっとお会いしたいというのである。ところが、6月の末頃になると、女君の周囲から「その人のもとへいなむずなり（あの男の所へ行こうとしているそうだ）」という非難が起って来て、それを聞いた女君の兄が急に迎えにやってきました。そこで女君は楓の初めての紅葉したのを拾わせて、歌を詠んだ。「秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ」、秋になったら、とお約束していたとおりにもならないで、木の葉がしきりに道に降りつもるだけのはかない御縁でございましたね、と歌を書いて、あの人から使いが来たら、これを渡しなさいと言いつけて出ていってしまった。その後、消息は今日まで全く分からなくなってしまった。男はこのことを恨んで「夫の逆手をうちて呪ひをるなる」、更に、「いまこそは見め（今に思い知るだろう）」と怒っているということだ。

宮仕えの女君が初めは何とも思わなかった男にその熱心な求愛に絆され、心を許して将来を約束までしたのに、周囲に反対されて身を隠してしまったという話である。身体に出来た瘡が障害となり、夏が終わって秋になれば瘡も治ると考えたのが、2人を離れさず原因となり、女君はこの男に呪われる羽目になったのである。自分の意志をもたない身勝手な女君というのではなく、周囲の喧しい時代の女性のあり様だったのではないだろうか。一方、男の女君を思う気持ちは今も昔も変わらないもののようである。

ただ、この話には珍しく内容部に不自然な重複があるのが気になる。「この女、かへでの初紅葉を拾はせて、歌をよみて、書きつけておこせたり。」と歌の前にかかれ、歌の直ぐ後に、「と書きおきて、『かしこより人おこせば、これをやれ』とて去ぬ。」とあるのである。

先学は前者を「物語現場の中の男の立場で述べ」、後者は「物語者の側から物語られている」¹⁵と解釈されているが、いかがなものだろうか。

19.「^{むばら}菟原の郡」の女君 第33段

男は菟原の郡（兵庫県芦屋市周辺）の女君の許に通っていたが、女君が、今度、帰って行ったらもう再びはやって来るまいと思っている様子だったので、「芦辺よりみち来る潮のいやましに君に心を思ひますかな」と歌をおくった。それに対して女君は「こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき」と返歌したという話である。男が、「一層あなたに私の心を思いつのらせることだなあ」と詠んだのに対して、「人目につかない入江のように人知れず思う心を、どうして舟を進める棹なんかで指し示してそれと知ることが出来ようか」¹⁶

と女君は返したのである。ここで面白いのは付言である。終わりに「田舎人のことにては、よしや、あしや。」とある。田舎者の歌としては、出来はどんなものだろう、上出来だろうか、やはり不出来だろうか、と言っているのである。女君の切ない胸の内を「いかでかは舟さす棹のさして知るべき（どうして、舟を進めるための棹が水底に正しく指さるようにはっきりとたしかに知ることができましようか。とてもはっきり正しくはわからないでしょう¹⁷。と返した歌に対する評言である。本文の校注者は「田舎人を賞めることへのこだわりであろうか。¹⁸」とするが、やはりここは都人の田舎人に対する矜持と見るのが妥当であろう。

20. 「西の京」の女君 第2段

男、「かのみめ男」が西の京の女君に心を寄せていた。女君は世間一般の女性よりも勝れ、殊に容姿よりは心が一段と勝った人だった。そのため、結婚もせず独身ですっといるわけでもなかったらしい、男がいないわけではなかったらしいのである。その女君に恋し、やっとしんみりと話し合うことができた翌朝帰って来て、この男がどう思ったのか、3月1日、春雨がしとしとと降る中で歌をおくった。「起きもせず寝もせで夜をあかしては春のものとながめ暮しつ」と。起きているのでもなく、そうかといって寝ているのでもなく、夜を明かした今日は、春につきものの長雨にももの思いにふけて過ごしたことですよ、と、女君に今の心中を訴えたのである。「まめ男」、誠実な、うわつついた経験さえない実直なあの男が「かのみめ男」であり、『伊勢物語』の主人公なのである。相手の女君は少し年上で、容姿以上に立居振舞、心根に素晴らしいものをもった人なのである。そこにこの男が心身ともにひかれたのである。

この第2段には『伊勢物語』の主人公である昔男の説明、「かの」「まめ男」が書かれている。更にはその時代が「平城の京ははなれ、この京は人の家まださだまらざりける時」とある。「かの」は指示語で、当然のことに既知の事実について使い、ここでは好色家としての業平伝説が当時一般であったことを意味しているのである。「まめ男」はその属性であり、「忠実男」、「こまやかなる男、実意のある男、又、好色にして風流なる男」と、『大日本国語辞典』等に記されている。

時代については先学の指摘するように、平安京遷都（延暦3年 794）後の、まだ都が整備されていなかった頃のこと、在原業平の實在（元慶4年 880 56才没）よりも50年ほど前のことという設定がされていることになる¹⁹。因にこの男の歌は『古今和歌集』巻13・恋3に「ありはらの業平朝臣」の歌として収録されている。

この2点からも『伊勢物語』が初めから虚構の物語として創作されたものと言えるのである。

21. 「はかなくて絶えにけるなか」の女君 第22段 第21段

第22段は、「はかなくて絶えにけるなか」、はかばかしく逢うところまでも到らないで切

れてしまった2人の仲²⁰が、女君には忘れられなかったのか、男の許に歌をおくった。「憂きながら人をばえしも忘れねばかつうらみつつなほぞ恋ひしき」と。男はやっぱりそうだったのかと言って「あひみては心ひとつをかは島の水の流れて絶えじとぞ思ふ」と返した。私も、もし、そなたと逢うことができたなら、この私の心一つをもっぱらそなたと通い合わせて、ずっといつまでも絶えまいと、そう思っていますよ²¹と、詠んでやったが、その夜、直ぐに女君の許に通って行った。昔のことこれからのことを2人で語り合って、男は「秋の夜の千夜をひと夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ」と歌を詠み、女君はこれに対して、「秋の夜の千夜をひと夜になせりともことばのこりて鳥や鳴きやむ」と返したという。男の「八千夜の間も共寝をしたら、その時には満足することもあろうか……もうこれで十分だと思うことなどはあるまい」²²に対して、女君は「長い秋の夜の、千夜を一夜と見なしたとしても、思いを語り尽きぬうちに鶏が鳴いて、夜が明けてしまうことでしょう²³と同じく熱い胸の中を詠んだのである。男は以後、従前にまして女君の許に心底、深い愛情をもって通っていったという話である。

埋れ火のような2人の愛が、女君の変わらない愛の告白によって火が付き、かつての恋人であった男との関係を取り戻したというのである。

第21段も同種の話ではあるが、ここでは2人の男女は結ばれないのである。

男と女はたいそう深く愛し合って、浮気心などはなかった。それなのにどんなことがあったのか、ほんの些細なことが原因で世の中が厭になり、女は家を出て行こうと思って歌をつくり、そこにあったものに書きつけた。「いでていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人は知らねば、私が出て行ったならば世間の人は軽薄だと言うだろうか、夫婦の仲を他人は知らないから、と歌を残して、家を出て行った。男はこの女君がこんな歌を書き残したのが不思議で心を隔てるようなことも覚えのないことなので、何が原因でこうなったのかと、ひどく泣き悲しんで、どちらへ探しに行ったらいいかと、門に出て、いろいろ探してみたが、どこを目当にとも思い当たらなかったで、家に入って、「思ふかひなきせなりけりとし月をあだにちぎりて我やすまいひし、愛していた甲斐のない、あの女との間柄であったのだなあ。この長い年月をいい加減な心で契って暮してきたのだろうか、いやそんなことはなかったものを、と歌を詠んでもの思いに沈んでいた。「人はいさ思ひやすらむ玉がづら面影にのみいと見えつつ、あなたはどうか、私を思っているのだろうか。幻にばかりいよいよ頻りにあなたの姿が見えはするのだが²⁴、と男は女君の許に歌をおくった。この女君はだいが時が経ってから、我慢できなくなったのであろうか、男のところに行ってよこした。「今はとて忘る草のたねをだに人の心にまかせずもがな」と、これに対して男は「忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし」と返した。もう終わりだと言って私を忘れる忘れ草の種をあなたの心に播かせたくないものです、という女君の歌に、男は、あなたが私を忘れるための忘れ草を植えているとだけでも聞いたならば、あなたが私を思っていたのだと知りもしようが、そうではないのでどうしようもない、と返したのである。

更にまた以前より増してお互いに歌の贈答をして、男は「忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにもものぞかなしき」、私を忘れていだろうと思ふ疑念で、別れた当時より一層悲しいことですよと歌をおくった。女君は「中空にたちある雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな」、中空にただよう雲が跡方もなく消えてしまったように、私自身頼るものがない身になったことですよ、と返歌した。だが、男も女もそれぞれにいい相手が出来たので、この2人の仲は疎遠になってしまったという話である。

この段の話には男君と女君とを反対に入れ替える異説²⁵がある。初めの部分で、女君ではなく男君が家を出て行くのである。しかし、男性中心の一夫多妻の中古社会にあっては、出て行ったのを男君とする方が一般には理解され易いものではあるが、「とよみおきて、出でていにけり。この女かく書きおきたるを」と続くところからは、やはり、女君が家を出ていったとするのが妥当である。確かに本作品中では、女君が家出するのは異例ではあるが、現実には男の甘言に乗ったり、老齢で出家するためにあえて家を出る例もあるのだから、これも現実的でその一つと考えることが出来るのである。

一度は結ばれた男女が、縁薄く、別れ別れになり、その後、再び愛を語り合う仲になったが、一方は従前にまして深い愛で結ばれるが、他方はそれぞれ新しい別の伴侶を得るという話である。愛の歌の贈答という形をとってそれぞれの愛を確め合ったのである。

男女の愛のあり様、生活のあり様が共に描かれたものとなっている。男性優位の社会にあってもそこには女性の自己主張も十分とはいえないまでも可能であったのである。

22. おわりに

三次にわたって書き継がれたこの作品は、やはり魅力的なものを数多く内包し、時代とともにその受容の仕方には変化はあったものの、今に至るまで古典としての輝き、価値を失ってはいない。本稿では登場する女性の生き様・あり様に視点を置いてみたが、そこには中古社会、男性中心社会に生きた女性の姿をかいま見ることができたと思う。

凡そ結婚已に定まって、故無くして三月まで成らず、及び逃亡して一月までに還らず、若しくは外蕃に没落して一年までに還らざらむ、及び徒罪以上犯せらむ、女家離れむと欲せば、聴せ。已に成りたりと雖も、其れ夫外蕃に没落して、子有るは五年、子無きは三年までに帰らず、及び逃亡して、子有るは三年、子無きは二年までに出こずは、並に改嫁聴せ。

(令 巻第四)

上記は『養老律令』の一節で、この前後に結婚適齢(「凡そ男の年十五、女の年十三以上にして、婚嫁聴せ。」)・離婚の問題(「凡そ妻棄てむことは、七出の状あるべし。」)等が記されている。

法としての「七去の状」などに女性の置かれた状況が明確に示されてはいるものの、この作品には現実に生きた女性の生の姿が男性の眼からではあるが、活写されている。若い女性の「もの病」、離れた男への思い、幼い恋と得恋、その後の妻としての行動、浮気な女心など

など、種々の愛の物語が描かれているのである。それらの中でただ現在と大きく違っているのは「歌」の存在である。歌を通しての愛の表現がすべてである。もちろん、この作品が歌物語であるので当然のことではあるが、歌を詠むことがそのすべてである、女性として生きるための必須のものであったという点に注目しなければならない。

注

- 7 竹岡正夫 (1987) 『伊勢物語全評釈』 右文書院 P313
- 8 同上 P1516・1519
- 9 同上 P1517
- 10 同上 P560
- 11 森野宗明 (1972) 『伊勢物語』 講談社 P210
- 12 『全評釈』 P362
- 13 同上 P401
- 14 同上 P32
- 15 同上 P1348
- 16 本文校注 P48
- 17 『全評釈』 P617・618
- 18 本文校注 P49
- 19 『全評釈』 P78
- 20 同上 P472
- 21 同上 P470
- 22 本文校注 P38
- 23 同上 P38
- 24 同上 P36
- 25 『全評釈』 P443

参考

1. 中野イツ (1981 : 1996) 『斎宮物語』 明和町・明和町教育委員会
2. 斎宮歴史博物館 (1999) 『幻の宮 伊勢斎宮』 朝日新聞社・朝日新聞社文化企画局名古屋企画部
3. 稲本紀昭ほか (2000) 『三重県の歴史』 山川出版社
4. 五島美術館学芸部 (1994) 『伊勢物語の世界』 五島美術館
鉄心斎文庫 伊勢物語文華館

神奈川県小田原市新屋 3 - 2

齋宮歴史博物館

三重県多気郡明和町竹川 503

いつきのみや歴史体験館

三重県多気郡明和町齋宮 3046 - 25

不退転法輪寺（不退寺・業平寺）

奈良県奈良市法蓮東垣内町 517